

## まんが田中正造発刊記念シンポジウム 「よみがえる郷土の偉人」



10月28日、文化会館で、まんが田中正造発刊記念シンポジウム「よみがえる郷土の偉人」が開催されました。

市では来年、平成25年に田中正造翁の没後100年を迎えるにあたり、正造翁の功績をたたえようと顕彰事業を進めています。このシンポジウムは「まんが田中正造」の発刊を記念し、原作者の水樹涼子さん（作家）、作画を監修された千葉修平さん（文星芸術大講師）、坂原辰男さん（田中正造没後100年顕彰事業を進める会会長）らを迎え開催されました。

シンポジウムに先立って行われた水樹さんの基調講演では、執筆にまつわる話が紹介され、作品に込めた思いや、作品を描いたうえで感じた思いが話されました。

また、水樹さん、千葉さん、坂原さんに、岡部市長を交えて行われたパネルディスカッションでは、今後の顕彰事業の展開やまんが制作に込めた思い、また、史実に基づいた解説などが話されました。

このほかくずう民話の会・語り部の部により正造翁の語り部が行われたほか、旗川小の4年生が正造翁の生涯を描いた寸劇を披露。想いがこもった語り部と、児童たちの熱演に大きな拍手が送られました。

正造翁の訴えは、産業と自然環境の再考が必要な現在に通ずるものがあります。この没後100年を機に、あらためて郷土の偉人・田中正造翁の功績をたたえましょう。



## 栃木県高等学校駅伝競走大会



11月3日、栃木県高等学校駅伝競走大会（男子第65回・女子第27回）が、運動公園周回コースで開催されました。

この大会は、前回まで高根沢町で行われていましたが、今回から佐野市での開催となりました。選手たちは運動公園陸上競技場でタスキをリレーし、周辺の周回コースを力走。沿道では市民の皆さんや各学校の関係者・生徒たちからの熱い声援が飛び交っていました。

男子は白鷗大学足利高校が初優勝、女子は那須拓陽高校が12年連続優勝を果たしました。男子で大会3連覇を目指した佐野日大高校は、9秒差で惜しくも2位となりました。



## 佐野市民駅伝競走大会

11月11日、第8回佐野市民駅伝競走大会が開催されました。

この大会は、地域の親睦を深め、競技層の拡大や明るく住みよい地域社会づくりを目的に毎年11月に開催されています。

市内各支部を代表する選手たちは、沿道の観客たちの声援に励まされながら、精一杯の走りでタスキをつなぎ、ウッドランド森沢から葛の里壱番館前までの19.03キロを駆け抜けました。

なお、上位チームの成績は以下の通りです。

- 優勝：犬伏支部
- 準優勝：城北支部
- 第3位：赤見支部



注  
目

健康福祉

募集

催し物

お知らせ

講座

話題



吉水小学校で、  
教育講演会が開催さ  
れました

10月23日、吉水小学校において、PTA文化補導委員会主催の教育講演会が開催されました。

講師には教育評論家の萩本悦久さんをお迎えして、「コミュニケーションを育てる4つの“あい”」という演題で、お話をうかがいました。

現在の子どもたちは、テレビゲームやパソコンに代表される「画面社会」の中で、ひとり遊びのために、社会性や共感性が働かなくなっているそうです。そこで、コミュニケーション能力を身につけるために、①信じ合う、②ほめ合う、③挨拶し合う、④感謝し合うことの大切さを話されていました。

また講演では、2歳年上の兄であるタレントの萩本欽一さん(欽ちゃん)との幼少期の思い出話などをユーモアたっぷりに話してくださり、そうした話の中から「子育ての大切さ」を話されました。



会場には、保護者の方ばかりではなく、地域の方々も多数来られていて、家庭・地域社会における教育問題への関心の深さが感じられるとても有意義な講演会でした。  
(市民記者 山口万里子)



地元の高齢者を招いて  
「そば会食会」

11月6日、葛生あくとプラザなどの3つの会場で、佐野市葛生地区社会福祉協議会の主催により、葛生地区に住む高齢者の皆さんに新そばが振る舞われました。



この日は同地区宮本町出身で、現在は市外でそば店を営む新里宗一さん(栃本町)を中心に7の方が、打ちたて・茹でたてのそばを提供しました。

3会場で計300人の方にそばが振る舞われ、このうち、葛生あくとプラザに集まったお年寄りには約150人。新そばの味に「美味しい、美味しい」と声を上げながら笑顔を見せたほか、久しぶりに会った方々と楽しそうに談笑していました。

主催された佐野市葛生地区社会福祉協議会の長島明二会長は「そばを味わうだけでなく、こうして家の外に出て、いろいろな方と顔を合わせてもらうことで孤立化を防いでいきたい」と話していました。



## 朝起きて顔を洗わない人 をミソツコケという

朝起きたまま顔を洗わない者をミソツコケといいます。面倒くさがってからだを動かさずともせず、身だしなみのわるい無精者をのしつていうときのことばです。一般に家庭内で親が子に対して使います。

「この子ったら、まだ顔を洗ってネンダガネ(ないんですよ)。このサエネー(汚らしい)顔を見リヤー(見れば)ミソツコケかどうか、すぐわかるダンベー(でしよう)？」

ミソツコケは、味噌桶が変化したものです。本来は味噌を入れておく専用の大きな桶や樽をいいますが、朝起きて顔を洗わない人を、味噌のついている桶(樽)のようだというように、味噌桶にたとえて言うようになりました。味噌は栄養があり調味料としてもすぐれている食品である反面、その色や形状などから汚らしく不快感があつて「味噌を塗る」(対面を汚す)・「味噌をつける」(失敗する)などという語句が生まれたのもそのためです。

昭和の初め頃までは、ほとんどの農家で米・大麦・大豆・麴(こうじ)・塩などを、大きな味噌樽に入れて発酵させ、自家用の味噌を作りました。これらの味噌樽は、ミソバヤ(味噌部屋)とかミソグラ(味噌蔵)といった特別に造った別棟に保存され、いつでも調味料として使用できる状態にしてありました。

(市民記者 森下喜一)